

# 観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



有限会社タートル 代表取締役  
亀谷 彰

石川県珠洲市上戸町の静かな山あい  
に、「湯宿さか本」は佇む。客室はわ  
ずか4部屋、食事処は一卓のみ。最大  
で8人しか泊まれない、まさに「日本  
一小さな宿」を目指して作られた宿だ。  
華やかな旅館の賑わいとは無縁だが、  
その小ささこそが訪れる人々を惹きつ  
けてきた。

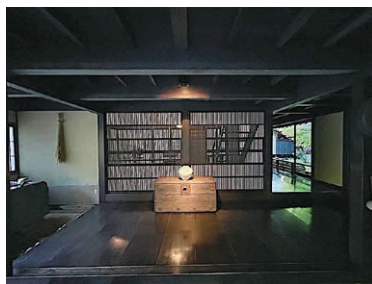
この宿を築いたのは、先代の坂本新  
一郎さん。十代で大怪我を負いなが  
らも「自分の好きな宿をつくろう」と決  
意し、過剰なサービスを嫌い、従来の  
旅館文化に一石を投じた。「お客さま  
は神様」ではなく、「お客と宿は人と  
人」。お辞儀も三つ指もなく、使い捨  
てアメニティも置かない。代わりにあ  
るのは自然の恵みを活かした食事と、  
互いを人として尊重する距離感だ。時  
にその姿勢は誤解を生み、開業当初は  
お客と喧嘩もあったという。だが今や、  
その哲学に共感する人々が全国から訪  
れ、半数以上がリピーターとして宿を  
支えている。



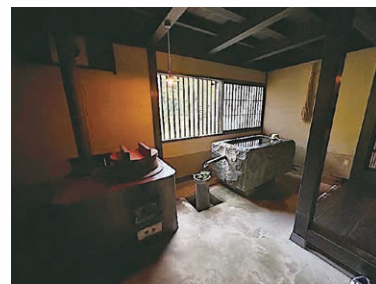
宿の背景には豊かな自然が広がる。  
4000坪の敷地と裏山、川や池、紅葉  
の木々。池は排水を濾過し、再び川に  
戻す循環の仕組みを持つ。目に映る風  
景の多くは、先代が手をかけて育てて

きたものだ。竹林も紅葉も、土建業者  
や地域の人の力を借りながら少しずつ  
形づくられた。自然に寄り添う姿勢は、  
宿の在り方そのものでもある。

ところが2024年元日の能登半島地



湯宿さか本玄関



水場の設え



敷地内の池と離れ



離れから池を望む

# 能登を伝える⑦ 奥能登珠洲「湯宿さか本」 ～小さな宿が映す、能登の未来

有限会社タートル 代表取締役 亀谷 彰

震は、こうした日常を一変させた。建物自体は倒壊を免れたものの、地盤の傾きや土壁の崩れ、食器やランプシェードの破損が相次いだ。停電は2週間続き、水は井戸から豊富に湧くのに電動ポンプが動かせず、ひたすらバケツで汲み上げるしかなかった。燃料が尽きる発電機を頼りにした日々は、決して平穏ではなかった。

「再開をどうするか」という大仰な決意はなかったという。冬休みを少し延ばす気持ちで過ごし、春になればまた宿を開けようと考えただけだった。だが、再開すると宿は人々の拠り所になった。常連客は「支援も兼ねて」と泊まりに来てくれ、復興支援やボランティアの人々も帰路の前に宿で休んだ。行政手続きで一時的に珠洲を訪れる人にとっても、宿は家の代わりとなった。震災後、宿を開けていることに一時は後ろめたさもあったが、「うちはうちでできることをやろう」と気持ちを切り替えられたことが、かえって宿の存在意義を強くした。

地震はまた、新たな学びをもたらした。造園業や土木に携わる人々との交流が生まれ、地盤の崩れや建物の傾きの背景に「土中の水や空気の流れ」が関わる可能性を知った。現代の土木の問題を踏まえつつ、自然と共生する道の作り方や庭の手入れに関心を深めているという。単なる宿主にとどまらず、能登の自然と人との関わり方を学び、未来に活かそうとする姿勢は、「湯宿さか本」の在り方そのものに重なる。

この宿の素晴らしさは、単に「小さな宿」という規模にあるのではない。

小ささゆえに、人と人が真正面から関わること。飾らず、作り込まず、自然と暮らしが織りなす時間を共有できること。そして震災という逆境を経て、その価値がより鮮やかに浮かび上がったことにある。

未来の「湯宿さか本」は、これまでと同じように華やかな拡大を目指さないだろう。細く、長く、訪れる人と能登の自然に寄り添い続ける宿であり続けるはずだ。その在り方は、震災を経験した能登全体にとっても、一つの指針となる。

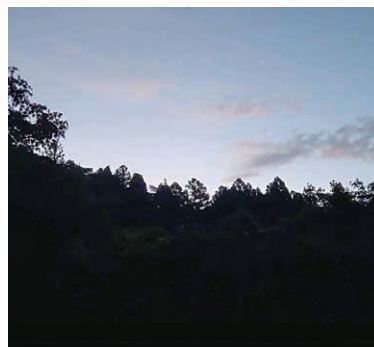
静けさと誠実さを灯すこの小さな宿が、これからも珠洲の片隅で人を迎え、自然と共に歩み続ける。その光は、能登の未来を照らすやわらかな明かりとなるだろう。



プライベート感のある食堂



回廊から中庭を望む



客室の窓から自然を感じる



## 湯宿さか本

代表者：坂本菜の花  
〒927-1216 石川県珠洲市上戸町寺社  
TEL：0768-82-0584

連載

SERIES